博 士 論 文 の 要 旨 及 び 審 査 結 果 の 要 旨

氏　　名	中本　咲久良
学　　位	博士（文学）
学 位 記 番 号	新大院博(文)第 66 号
学位授与の日付	令和 5 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学位規則第 3 条第 3 項該当
博 士 論 文 名	正岡子規の「新題」の研究 ―俳句革新とのかかわりを中心に―
論文審査委員	主査　教　授　堀　　竜一
	副査　准教授　廣部　俊也
	副査　教　授　足立　幸子

博士論文の要旨

本論文は，明治期の「新題」を手がかりに，正岡子規およびその周辺の俳論や俳句作品を検討して，正岡子規の俳句革新の実態を明らかにすることを目的とする。子規が月並・陳腐と批判した旧派の「新題」の扱い方と対比するとともに，古典俳諧（芭蕉・蕪村）に対する子規の評価から俳句革新運動における「写生」という方法論の確立に迫ることで，子規の俳句革新運動における「新題」の扱い方・位置づけを探っている。さらに，子規の俳句革新の手法が後世にどのような影響を与えたかを，「紀元節」とその異称「梅花節」の句作例や，高浜虚子編『新歳時記』，『季寄せ』を主な材料として論じ，「新題」がいかに俳句革新を推進したのかにまで論を展開している。

本論文は，以下のとおり構成されている。

第一章では，「明治期の発句における新事物と題・季のかかわり―『俳諧開化集』を例に」と題し，三節に分けて論じている。明治になって，新事物を題とした発句をどのように扱うかは大きな問題であった。題として取り込むには，原則的には季をもつものであることが最適だからである。季語以外の題のもとに詠まれた近世の発句の場合，一句において季語と題が分離するという現象が見られ，この方法が明治期の新事物を発句に題として取り込む上での先例となったといえる。本章ではこのことを西谷富水編『俳諧開化集』を通して指摘している。さらに，発句の世界に取り込まれたはずの新事物が，なかなか季語化するには至らなかったことを，『俳諧開化集』前後刊行の『季寄せ』の調査結果から指摘し，その背景を『季寄せ』という書物の性質と関連づけて考察している。

第二章では，「子規の俳句革新における新季語―「新行事」題を例に」と題し，三節にわたっ

て「新行事」題について論じている。実施日が定まっている「新行事」は，季の問題が絡んでくる他の「新題」と違って，季語としても取り込みやすかったはずだが，子規派の選集『新俳句』での「新行事」題の立項は「クリスマス」「一月」の他見られない。これに対し，旧派では当時すでにこれら「新行事」題を類題句集や季寄せに多く取り入れていた。一見「新奇」に思える「新行事」題の取り込みに対し，旧派に比べて子規の態度が慎重であったとし，その理由について論じている。旧派による「新行事」の取り込みは，一見革新的なようでありながら，その実態は，近世俳諧が俗語や新語を取り込んできたこととあまり変わらなかったとし，子規は「新行事」を始めとする新題の導入が，旧派に於いては必ずしも俳句の内容の革新にまで行き届いていないことを見抜いていたのではないかとしている。加えて子規自らも，「新行事」詠の実作を通して，「古人の類句」ならぬ「同時代の類句」の多い「意匠の陳腐なる」句になってしまうことが往々にして起こりうることも自覚していたのではないか，その意識が，『新俳句』における「新行事」題採用の慎重な態度へ繋がったのではないかと考察している。

第三章では，「俳句革新期における「新題」」と題して，俳句革新期における「新題」について四節に分けて論じている。旧派の発句と，子規ら一派の俳句の両者における，「新題」の扱い方を具体的に取り上げ，その姿勢を比較検討している。明治維新によって様々な新事物が社会に導入されると，文学の中にそれらを取り込もうとする動きが起こったが，俳諧もその例外ではなかった。しかし，新事物を平句ではなく発句の中へ，それも単なる句の一素材ではなく，発句の主たる題として詠もうとするときには，季の問題を無視できなくなり，一筋縄ではいかなかった。明治の「新題」を発句に取り込むのは，容易なことではなかったと，新事物取り込みと季の問題を乗り越えることの困難な実態を明らかにしている。

第四章では，「正岡子規の古典研究と俳句実作への還元― 芭蕉句および蕉風俳諧を中心に」と題し，三節にわたって論じている。俳句革新を目指した子規が，一見，矛盾するごとき古句への視線を持っていたことを指摘し，その意味について論じている。本章では，俳句実作者に対し，古句を読むことを奨励する子規の発言に焦点を当て，古句を読む意義について，子規がどのように考えていたのかを検討している。

第五章では，「「紀元節」とその異称「梅花節」について」と題し，二節に分けて旧派と新派における，「新題」「紀元節」および「梅花節」の扱いの違いを論じている。一般語としては今日ほとんどつかわれていない「紀元節」および「梅花節」という語が，現行の『歳時記』にはまだ収録されていること，加えて「梅花節」については，現段階で俳句以外の用例が非常に少ないことから，本章では，和歌・短歌，および発句・俳句といった明治以降の短詩系文学作品を中心に取り上げ，「梅花節」という異称がつかわれるようになった経緯を検討している。

第六章は，「高浜虚子編『新歳時記』の三版種」と題して，正岡子規の高弟・高浜虚子の，「新題」の扱い方を，『新歳時記』を材料に検討している。本章では虚子編『新歳時記』三版種間のすべての立項「季題」の異同を調査することによって，『新歳時記』の改訂，再改訂のあり方を明らかにし，さらに異同の見られた立項「季題」を複数取り上げて，二度の改訂の実施の背景を考察している。

第七章は「高浜虚子編『季寄せ』考―『季寄せ』改版と虚子編『新歳時記』修改訂の関係性」と題し，高浜虚子編『季寄せ』を材料として，虚子の「新題」の扱いを二節に分けて論じてい

る。昭和 15 年 6 月に初版が刊行された高浜虚子編『季寄せ』は，虚子単独責任編集の最後の季寄せである。同書は，昭和 9 年 11 月初版刊行以来のロングセラーである虚子編『新歳時記』に拠っている。本章では，虚子編『季寄せ』について虚子生前の改訂の有無を明らかにし，さらに同書の改訂と虚子編『新歳時記』の改訂の関係性を検討している。

以上の考察（検討）に基づき終章において，中本氏は，正岡子規が明治の新事物を「新題」として俳句に取り込むまでの流れを見直し，子規が安易で闇雲な新事物取り込みを否定しつつも，俳句革新の一つの重要な契機として，「新題」の模索を積極的に行っていた，それが後に，弟子である高浜虚子と河東碧梧桐とに，それぞれ別の形でではあるが，引き継がれたと結論づけている。

審査結果の要旨

本論文は，正岡子規の俳句革新の実態に，新事物の取り込み・「新題」に着目し迫ろうとした点に独自性が認められる。俳句革新の革新性・新しさを正岡子規は，月並み・陳腐に対比して「新奇」と呼ぶが，主題・素材・言葉・趣向・意匠等のどの点に「新奇」が認められるのか，先行研究では掘り下げて深く考察されてきたとは言い難い。本論文が新事物取り込み・「新題」の観点から「新奇」の実態を解明している点は高く評価できる。

文明開化後の明治近代日本の社会・世界を文学の題材とする場合，俳句においては，季語化・季題化の問題を解決しなければならない。伝統的表現法に根強く依拠する俳諧の場合，「新題」は大きな衝突を引き起こす。何をどのように表現するかは，社会・世界をどのように見るかということとも密接につながっている。正岡子規の「写生」が西洋絵画の「写生」に影響を受けていることは従来指摘されてきたが，本論文では「写生」を，世界をありのままに見ることと捉える。近代世界が，近代以前の伝統的世界には存在しなかった新事物に満ちているのだとすると，その世界をありままに見て表現することが「新奇」を産み出すことになるだろう。このように「写生」を捉え直したことは，本論文の「新題」への着目による成果といえよう。

また，近代日本の新暦の中に，あたかも古来の暦のごとくに組み込まれ，確立した「紀元節」などにも注目し，いかに季語として取り込まれ，機能しているかについても本論文は考察している。子規の死後，太平洋戦争敗戦を境に季語・季題は変化する。本論文はそこまでを考察の射程に収め，正岡子規が取り組まなかった季語の体系化である『歳時記』と，その簡略版である『季寄せ』に着目し，子規の弟子である高浜虚子の編纂の変遷を辿っている。このことは，正岡子規から高浜虚子・河東碧梧桐への「新題」の継承・発展を明らかにするだけでなく，「新題」の外延の問題を考えるうえで，非常に有益な観点であるだろう。明治から太平洋戦争中にかけて，日本の軍事的進出・侵略にともない，日本の国土・版図が膨張し，中国・朝鮮半島・南洋などの新事物が俳句の世界に取り込まれて行った。俳句の世界の地平が拡大することと，「新奇」な表現の成立，俳句の可能性との関係は，文明開化による「新題」の成立と，本質的に同一のことだといえる。その点でも，本論文の着眼点は今後の研究の発展を大いに期待させるものである。

なお，本論文は正岡子規の俳句革新と「新事物」取り込み・「新題」との関係性を，子規および，子規の弟子である高浜虚子・河東碧梧桐にまでたどり論じたものであり，日本近代文学固有

の分野に関する内容である。そのことから，本論文は，博士（文学）の学位を授与することが適切であると判断した。

以上の審査結果から，本論文審査委員会は，全会一致で，本論文が博士論文としての水準に達しており，博士（文学）の学位を授与するに値するものと判断した。